子ども学探訪

1……7……28

幼児の教育

アーカイブズとの対話④

56……109・110

ちょうど百年前の『幼児の教育』から
―第十六巻第四号（一九一六年四月号）―

構成／結城凛々
（編集委員会）

ちょうど百年前に発行された『幼児の教育』（当時の誌名は『婦人と子ども』）から二編、当時の保育実践の様子がうかがえる記事を紹介します（現代漢字、仮名遣いにしてあります）。

野口幽香（一八六六・一九五〇）は、東京女子師範学校で学んだ後、華族女学校附属幼稚園という富裕層の子どもが通う幼稚園で働きながら、貧しい子どものための幼稚園を森島峰と共に東京・四谷につくり（二葉幼稚園）、一日七～八時間の保育をしたことで有名です。当時は一般的でなかった卒業証書をこれら対照的な幼稚園で採用した体験と、その「結果」について報告されています。

幼稚園の卒業式

学習院教授　野口幽香

幼稚園の卒業証書は学習院の方では始めの中はしなかったのですが、近頃する事に致しました。さてして見ますと、大変にその結果がよいと云う事がわかって参りました。幼稚園というものが子供の記憶から消えないというよい結果を見る事が出来ました。大きくな

結城凛々（ゆうきりり）
保育研究者。毎日の保育を考えるために幼児教育の歴史を知ることが意外に近道だと感じ始めている。『幼児の教育』アーカイブズへの世界中からのアクセス数に驚いている。

ってから此の記念の証書を出して見て幼稚園を思い出す、たった一ひらの紙ですが、幼稚園と子供の生涯をつなぐ大変に価値のあるものになるのでした。

其後貧民幼稚園の方でも思いついて、証書をやる事に致しました。貧民の方ではもっと大切な事でありました。何年間此の幼稚園で保育を受けたという事が子供の一生に取って非常な喜びでありかつ其証書は将来職業を求むる上に於てもよほどの便宜を得る事になるのでした。証書の文句は学習院の方は別に面白いものでもありませんが、貧民の方は左の通り認めて居ります。

「右は二葉幼稚園に於て保育を受けたる事を証す　神を信じますます善良ならん事を祈る」

幼稚園としてはもちっと子供らしいよい詞がほしいのですが、今一寸考えつきませんから、教えて下さる人があるまでこのままにしておくつもりです。それから裏に園歌を記して、設立者二人の名を書きます。

子供が一番おしまいに幼稚園に来ました日に、学習院では花壇の苗を分配してやります。また前年の種を採集しておいた種類を分けてやる事もあります。柿の種やら椿、藤、蜜柑などありあわせを分配するのです。そして「今日帰ったら直に蒔いておおきなさい、あなた方が大きくなる時分に花が咲くから」と云いきかせますのです。一粒の種が毎年成長して花が咲き出した時分に、之を眺めて幾度か反復すれば、記憶がいつまでも新しくせらるるであろうと思ってで御座ります。かつ将来疲れた時には此花の下でやすめというつもりなのです。

貧民幼稚園の方では、卒業式には御馳走をします。赤飯をやります。それから動物園へつれて行く事にして居ります。弁当をこしらえて、電車を買い切ってつれて行きますのです。これは子供の大変な楽しみになって居り

ます。入学の当初からそんないたずらをすると動物園へ行かれないよと云って母親がたしなめて居るのをききました。そんなに印象を深くして居るのですから、其日の事は生涯忘れないでしょうと思って居ます。

写真は撮る事に致して居ります。始めは気がつかずに居りましたが此頃は毎年撮ります。貧民幼稚園の方のは値段を特別にやすく致しまして、平生からの積金で買わせて居ります。写真と証書を生涯の記念にしようと云うのであります。

次は、須子トミによる寄稿文です。福島市立幼稚園の保育者（当時は保姆）で、弊誌にはその文章が計三回掲載されています。ちょっと目立つ子どもと保育者との関係づくりのプロセスについて論じられています。

当時は、子ども一人で登降園するのが普通だったようです。付添いのおばあちゃんから子どもを引き離すときの保育者の姿はちょっと意外な面もありますが、遊びを通して周りの子どもたちとの関係づくりを促したり、その中で素直に態度を変化させる子どもの姿は今と変わりません。

附添人を離れぬ子供

福島幼稚園　須子トミ

或る幼児祖母に附添われて通園すること半歳、いくら置去らんとしてもきき入れません。祖母も亦置き去るにしのびぬ有様です。一体此子はなかなかのきかずもので、友達などとも角力などもする位の元気者なのです。併し附添だけは離れません。保姆も一人で来園する様にすすめますけれども、明日から一人で来ると申しては、又送られて附添われます。かくの如く幾日もくりかえしました。処が或

時祖母が便所に行きましたのを自分を置て家に帰りしものと思い、保姆の目をしのんで家ににげかえりました。これで一人で家にかえれるということが証明されました。或日祖母さんが保姆に向って申しますに、此子は来四月は小学校へ行かねばなりませんのにこれでは困ります。先生何とか工夫はありますまいかと。そこでこれはよい事を申されたと思い、あなたが此お子さんを全く私におあずけ下さって、私の為すがままにして下さるなら、必ず明日から一人で通園する様にして上げますと申しましたら、何卒先生におまかせいたしますからということでしたから、保姆は直に其子を一室につれて参り、あなたは先生を毎日毎日ばかにして居りますね。そんなに先生をだますとよい人になれませんよと怒り顔して申したら、あしたからはきっと一人で来ると申しました。それではおばあ様に今直ぐにかえって貰いましょうと、祖母の許に連れて参り、此お子さんはもはや一人で幼稚園に居られます。又明日から一人で来られますからおかえり下さいと申しましたら、祖母さんはそれではと一礼してかえられました。これは兼て打合わせて置いたのです。ところが彼の児は大声出しておばあさんとなき出しましたがそれでもかまわずに又元の一室に抱いて連れ参り、明日からはほんとうに一人で来ることを堅く堅く約束し保姆は顔をやわらげてこれから先生と汽車ごとしましょう、あなたは汽車の駅長さんだと此子の最も近き家から通園して居る友達四、五人と汽車ごっこを始めました。そして皆さん此駅長さんによくきいておのりなさいという風に、大にその子を尊重して遊ばせました処が、それから大元気となり、先生又あしたもしましょうね、あした私一人で来るなど申しました。此時の保姆の嬉しさ何に例えん。かくして遂に一人で通園する様になりました。